っという間であろう。お館さまの頭の中に、またまた妙案がうかんだ。
「今度の一回りは、御牧の内の山の峰々をも細かに巡って来い」
と、月毛に言いふくめた。
が、とてつもなく目のいい遠見役が、
「ただいま月毛は、観音峰へ駆け登りました」
と言うと、お館さまは顔色を変え、太鼓を打つ合図をした。まだまだ約束の時には間があるというのに…。
太鼓の音を聞いた月毛は、力つきて天狗の窟の岩から真っ逆さまに落ち、二度と立ち上がることはなかった。
月毛が死んだと聞いた生駒姫の目からは涙がこぼれた。が、その涙がかわくと、
「誰をも恨みますまい」
と、ためらうこともなく長い髪をぷっつりと切った。
「月毛よ。姫はどこにも行かないわ。月毛の好きだった自然の中で、御牧で生涯を終えた駒たちを弔うわ」
生駒姫は静かに合掌をするのだった。

第6話　国分寺の鐘

はじめに

私の文机の上に1つのペン立てがある。これは上田千曲高校建築科の相原文哉先生にいただいたもので、約500年前の信濃国分寺三重塔が昭和8年の大修理の際に取り替えられた時の古材で作られている。いわば室町時代中頃までさかのぼるこのペン立てには、三叉の三鈷杵(さんこしょ)という法具を持つ兎と、なんと3本足の烏(からす)の焼刻印が押されている。

相原先生の書かれた「三重塔の古材」の案内書によると、八日堂(現国分寺本堂)の本尊(秘仏薬師如来像)左右の脇侍として日光・月光菩薩がおわす。日光菩薩像の持ち物としての日輪には「三本足の烏」が、月光菩薩像の月輪には「兎」が陽刻されているという。

それにしても烏の足が3本というこのミステリアス、なぜ3本なのかを、そのうち相原先生が解明してくださるであろう。

それにしても人と人との縁とは、摩訶不思議なものである。相原先生にしても、しかりである。テレビのドキュメントに出演しておられるとか。建築の他に仏像にも造詣が深く、信濃路の仏像についての著書もあり、常に1ファンとして尊敬の念をもっている。

わが生家に先生の描かれた1枚の仏像画がある。それは、奈良市にある大安寺の揚柳観音立像の胸部から上で、初めて見た時は写真かと見まがうほどの繊細なタッチで描かれていた。ぜひ、この仏さまにお会いしたいという思いが実現して、大安寺の宝物館で拝することのできた喜びはひとしおであっ